

たいめんさんちゆう 対面三重 (名) 芝居の鳴物の三重にて、対面の場を用ふるもの。

たいめんじよ 対面所 (名) 客客に對面する所。應接所。東鑑十八、十九、午未兩時大風、御對面所傾倒、長祿二年以來申次記、御對面所(御出座)にて親子兄弟などの、久しぶりにて對面することを演ずる幕。

たいもく 題目 (名) 標題。外題。朗吟經爲題目佛爲眼、知汝花中植善根、白氏文集、各以首句命爲題目、元稹善經諸經題目、所立不同、となへな。名號。名目。諸門、是れに持ちたるは桑の弓中、まづづめてたき題目なり、北史、齊時殷初成、未、有題目帝詔、近侍各名之、條件、簡條、平治、題、叶ひ難き題目なる由、申されければ、徒然草、九條相國伊通公の款狀にも、ことなることなき題目も書き載せて自置せられたり、四佛語、日蓮宗にて、其所依たる法華經の表題に南無を加へたる南無妙法蓮華經の七字の稱。二代男、最早今なり、低う念佛と申す。我れは題目唱へ、さあ是れまで、傾城反魂香、宗宗旨の手向草、題目、眞言、念佛の題向に更くるも。

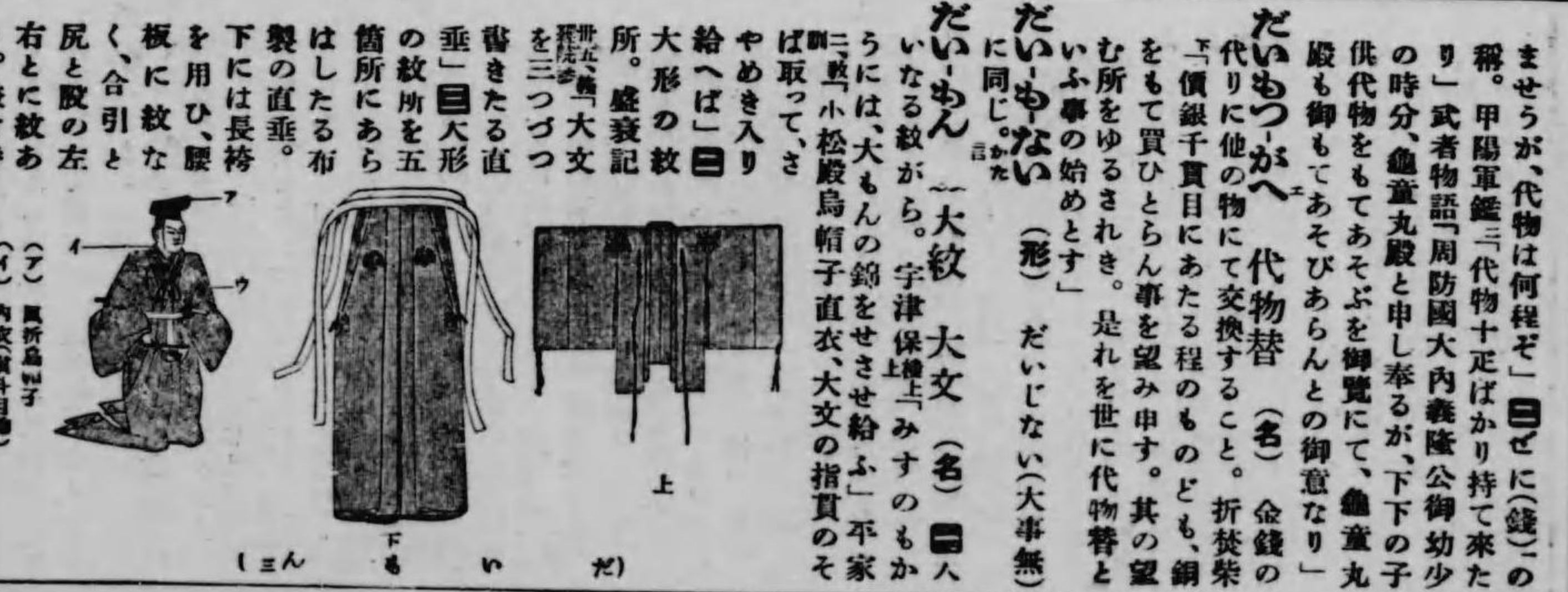
たいもくかう (名) 植、おほざるま、土木香の異名。たいもくじやう (名) 題目講 (名) 日蓮宗の信徒の組合。

たいもくじやうちゆう 題目講中 (名) 題目講の講中。浮世親仁形氣、不斷の心ばへを氣の毒がり、題目講中を顧み、たいもくじやう 題目宗 (名) 法華經の題目を唱ふるよりいふ。ほつしゆら(法華宗)の俗稱。類聚名物考、日蓮宗又法華宗、題目宗。たいもくせう 題目僧 (名) 佛語。たいもくせう (題名僧) 同。たいもくたいこ 題目太鼓 (名) 法華の題目を唱へながらたたく太鼓。たいもくせうり 題目踊 (名) 昔時、山城國松が崎にて、七月十六日の夜、題目節を附けて男女一所にをどりたる踊。鷹筑波、妙なふりするは題目踊かな、たいもくじ 大文字 (名) だいまんじ(大文字)に同じ。たいもくじのほた 大文字旗、大きな文字を記せる旗。甲陽軍鑑三元伊奈におはします時の大文字旗なり。たいもくじちち (名) 植、こしよいちこの異名。たいもくがひ 大文字貝 (名) 動、たこのまくら(海燕)の異名。たいもつ 退没 (名) しりぞきかぐるること。盛衰記、上界の天人も退没の雲には悲しむらぬ。たいもつ 大物 (名) だいぶつ(大物)に同じ。(盛)大物はつりどり、大いなる物は、一時に其の全體を動かし蘇れども、少しづつ削り取れて久しきを經ば、遂に其の全體を取り終るに至るといふこと。大事は功を積みて漸次に成就すべく、一時にはなし難き譬へにいふ語。

たいもつ 代物 (名) あたひのし、代金。代料。狂言、それなら求めませうが、代物は何程ぞ、(せに錢)の稱。甲陽軍鑑、代物十疋ばかり持て來たり、武者物語、周防國大内藤隆公御幼少の時分、龜童丸殿と申し奉るが、下の子供代物をもてあそぶを御覽にて、龜童丸殿も御もてあそびあらんとの御意なり、たいもつが 代物替 (名) 金錢の代りに他の物にて交換すること。折焚柴、價銀千貫目にあたる程のものども、銅をもて買ひとらんと事を望み申す。其の望む所をゆるされき。是れを世に代物替といふ事の始めとす。たいもつない (形) だいなない(大事無)に同じ。たいもん 大紋 大文 (名) 人いなる紋がら。宇津保傳、みすのまかろには、大もの錦をせさせ給ふ、平家三三小松殿烏帽子直衣、大文の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、大形の紋所。盛衰記、大文を三つづつ書きたる直垂、大形の紋所。五箇所にあらはしたる布製の直垂。下には長袴を用ひ、腰板に紋な合引と尻と取の左右とに紋あり。鎌倉時(ア) 眞宗御即位(イ) 内裏御即位(ウ) 内裏御即位

たいもつ 大紋 大文 (名) 人いなる紋がら。宇津保傳、みすのまかろには、大もの錦をせさせ給ふ、平家三三小松殿烏帽子直衣、大文の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、大形の紋所。盛衰記、大文を三つづつ書きたる直垂、大形の紋所。五箇所にあらはしたる布製の直垂。下には長袴を用ひ、腰板に紋な合引と尻と取の左右とに紋あり。鎌倉時(ア) 眞宗御即位(イ) 内裏御即位(ウ) 内裏御即位

たいもつ 代物 (名) あたひのし、代金。代料。狂言、それなら求めませうが、代物は何程ぞ、(せに錢)の稱。甲陽軍鑑、代物十疋ばかり持て來たり、武者物語、周防國大内藤隆公御幼少の時分、龜童丸殿と申し奉るが、下の子供代物をもてあそぶを御覽にて、龜童丸殿も御もてあそびあらんとの御意なり、たいもつが 代物替 (名) 金錢の代りに他の物にて交換すること。折焚柴、價銀千貫目にあたる程のものども、銅をもて買ひとらんと事を望み申す。其の望む所をゆるされき。是れを世に代物替といふ事の始めとす。たいもつない (形) だいなない(大事無)に同じ。たいもん 大紋 大文 (名) 人いなる紋がら。宇津保傳、みすのまかろには、大もの錦をせさせ給ふ、平家三三小松殿烏帽子直衣、大文の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、大形の紋所。盛衰記、大文を三つづつ書きたる直垂、大形の紋所。五箇所にあらはしたる布製の直垂。下には長袴を用ひ、腰板に紋な合引と尻と取の左右とに紋あり。鎌倉時(ア) 眞宗御即位(イ) 内裏御即位(ウ) 内裏御即位



たいもん 大紋 大文 (名) 人いなる紋がら。宇津保傳、みすのまかろには、大もの錦をせさせ給ふ、平家三三小松殿烏帽子直衣、大文の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、大形の紋所。盛衰記、大文を三つづつ書きたる直垂、大形の紋所。五箇所にあらはしたる布製の直垂。下には長袴を用ひ、腰板に紋な合引と尻と取の左右とに紋あり。鎌倉時(ア) 眞宗御即位(イ) 内裏御即位(ウ) 内裏御即位

たいもん 大紋日 (名) 大いなる紋日。常より盛んなる紋日。大磯虎稚物語、女郎もすね給ひ、今日の嫁な紋日も、内に格子の柱をかぞへ、浮舟にておはします。

たいや 對屋 (名) たいのや、對屋に同じ。たいや 速夜 (名) 忌日の前夜。宿尾。半齋。たいや (英) [Tide] (名) 車輪の周邊に附くる膠膜又は鐵製の輪。たいや 臺屋 (名) 食物を調理する所。鎌倉年中行事、御所造、西之御臺屋。那須、東之御臺屋は宇都宮、御臺所は三浦介役所也、遊廓にて、臺の物を調ふる家。

たいや 大洋 (名) おほやうみ。大海。耶律楚材詩、北漠絶、窮城西隅抵大洋、二、大陸を包圍し、地球上の五分の四を占むる大海。大平洋、大西洋、印度洋、北水洋、南水洋の五つに分かつ。たいやう 太陽 (名) 地球に最も近い恒星。地球よりの距離三八〇六〇〇〇〇里、其の直径三五四〇〇〇〇里、地球に比すれば其の質量は三三三〇〇〇〇〇倍、大きさは一三〇五〇〇〇〇〇〇〇〇〇倍、同じく自轉し、其の周期は約二十六日なり。其の表面は常に光輝赫赫とし、凡ての惑星は此の光によりて輝き、吾が地球も亦之に依りて晝夜の別を生ず。其の光の強さは、155 x 10^7 燭光にして、満月の光の強さの六〇萬倍なり。又、其の表面より放射する熱量は一平方米に就き一四〇〇〇

たいやう 類陽 (名) いろひ。ゆふの類日。落陽。斜陽。夕陽。王冷然文、望類陽之初落、見凝月之孤生。たいやう 體様 (名) ありさま。さまたち。状態。體形。たいやう 對揚 (名) つりあふこと。西蔵。對等。太平記、六波羅の勢を見合はすれば、對揚すべき迄もなき大勢なりけれども、同、六波羅宮方は對揚

たいやう 太陽時 (名) 太陽日(天)太陽日二十四分の一。太陽時に長短あるを以て、太陽時、亦均一ならず、冬短くして夏長し。たいやうせき 太陽石 (名) 隕石の一種。微細なる七色を放つものあり。多くは裝飾用とす。たいやうちゆう 太陽蟲 (名) 動、原生動物中、根足蟲類の一種。體は圓形、絲狀の足を放射狀に出だし、骨格は體の中央より放射せる針より成る。淡水。鹹水、共に産し、往往、群體をなす。たいやうてう 太陽潮 (名) かんまんとてう(干満潮)を見よ。たいやうちち 太陽日 (名) 太陽日、一子午線を通過してより、再び其の子午線を通過するまでの時間の稱。太陽が黄道上を運行する速さは常に均一ならず、冬速かにして夏遅きを以て、従ひて太陽日も夏長くして冬短し。たいやうねん 太陽年 (名) 太陽が春分點を發し、黄道を一周して再び春分點に至る時間の稱。太陽年は恒星年に比するときは二十分二十三秒短し。是れ春分點が黄道上を運行するによる。たいやうまつり 太陽祭 (名) ちちえらまつり(日曜祭)に同じ。伊呂波字類「太陽祭、日曜祭」。

たいやうれき 太陽曆 (名) 天、ぐれごりあん曆に同じ。吾が國にては明治五年十一月九日舊曆を廢して太陽曆を採用し、其の年十二月三日を明治六年一月一日としたり。明治五年布告第三百三十

たいやうちゆう 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。

たいやうかい 太陽界 (名) 太陽系に同じ。たいやうけい 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。

たいやうけい 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。

たいやうけい 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。

たいやうけい 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。

たいやうけい 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。



たいやうけい 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。

たいやうけい 太陽系 (名) 太陽を中心とし、其の周圍を廻る水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星なる八大惑星と、之に屬する衛星並びに約六百に近き小惑星及び彗星、流星等を合して、太陽系を稱す。

たらあーだら

たうり

たうえ

たうか

たら網からまされて、浮かみもやらぬお魚とは和漢三才圖會、撒網(たら)...

たらあみぶね 投網船(名) とあみぶね投網船に同じ。

たらあんりう 一道安流(名) 茶の湯の一流。金森道安宗和が織部流に遠州流を加へて案出したもの。

たらい 討夷 討伐すること。たらい 討夷 討伐すること。

たういせむら 唐伊吹(名) 唐伊吹(名) 唐伊吹(名)...

たういせむら 唐伊吹(名) 唐伊吹(名) 唐伊吹(名)...

たういせむら 唐伊吹(名) 唐伊吹(名) 唐伊吹(名)...

たういせむら 唐伊吹(名) 唐伊吹(名) 唐伊吹(名)...

たうちば 唐團扇(名) 支那風に擬したる團扇。昔時、軍陣にて采配の代りに用ひたるより軍配團扇といふ。

たうちば 唐團扇(名) 支那風に擬したる團扇。昔時、軍陣にて采配の代りに用ひたるより軍配團扇といふ。

たうちば 唐團扇(名) 支那風に擬したる團扇。昔時、軍陣にて采配の代りに用ひたるより軍配團扇といふ。

たうちば 唐團扇(名) 支那風に擬したる團扇。昔時、軍陣にて采配の代りに用ひたるより軍配團扇といふ。

たうえき 道釋(名) しゆくば、釋尊。太平記、道釋を重ねて、無路。京都に著きしかば。

たうえき 道釋(名) しゆくば、釋尊。太平記、道釋を重ねて、無路。京都に著きしかば。

たうえき 道釋(名) しゆくば、釋尊。太平記、道釋を重ねて、無路。京都に著きしかば。

たうえき 道釋(名) しゆくば、釋尊。太平記、道釋を重ねて、無路。京都に著きしかば。

たうか 棹歌 權歌(名) 舟なうた。漁歌。朗詠。郷派歌行征戎客、棹歌一曲釣漁翁...

たうか 棹歌 權歌(名) 舟なうた。漁歌。朗詠。郷派歌行征戎客、棹歌一曲釣漁翁...

たうか 棹歌 權歌(名) 舟なうた。漁歌。朗詠。郷派歌行征戎客、棹歌一曲釣漁翁...

たうか 棹歌 權歌(名) 舟なうた。漁歌。朗詠。郷派歌行征戎客、棹歌一曲釣漁翁...



たうか 堂下(名) 堂のした。又、そこに居る身分の人。百合若大臣野守鏡...

たうか 堂下(名) 堂のした。又、そこに居る身分の人。百合若大臣野守鏡...

たうか 道幸棚(名) 道幸なる者の創意によりていふとぞ。茶室の爐傍の壁につくりて、茶器を載する袋戸...

たうか 道幸棚(名) 道幸なる者の創意によりていふとぞ。茶室の爐傍の壁につくりて、茶器を載する袋戸...

たうか 道學先生(名) 道學を修めたる先生。道學に備して事理に暗き學者。頑固なる學者。

たうか 道學先生(名) 道學を修めたる先生。道學に備して事理に暗き學者。頑固なる學者。

たうか

たうか

たうか

たうか

たうか

たから

たから(タカラ) 宝君 大事と思ひ奉る主君。大切な主君。榮華貴族我が寶の君は、いづこにあらめさせ給へるぞや。大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りにそ待らね」

たから

(贖買)の持ち腐れ 寶を持ちながら利用せぬこと。(贖買)の山に入りながら手を空しくして歸る よき場合にありながら、その望みを果たし得ず。三代實録「貞和三年、山崎の徒、藤原の刀林之永割、平家十、億億萬劫があひだり、生死にりんし、て、たからの山に入りて手をむなしうせん事」正法念經「閻羅王爲人説傷云、汝得人身不修善道、加入寶山空手歸、汝今日自作還自受、叫喚苦者欲何爲」

たから

たから(タカラ) 寶君 大事と思ひ奉る主君。大切な主君。榮華貴族我が寶の君は、いづこにあらめさせ給へるぞや。大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りにそ待らね」

たから

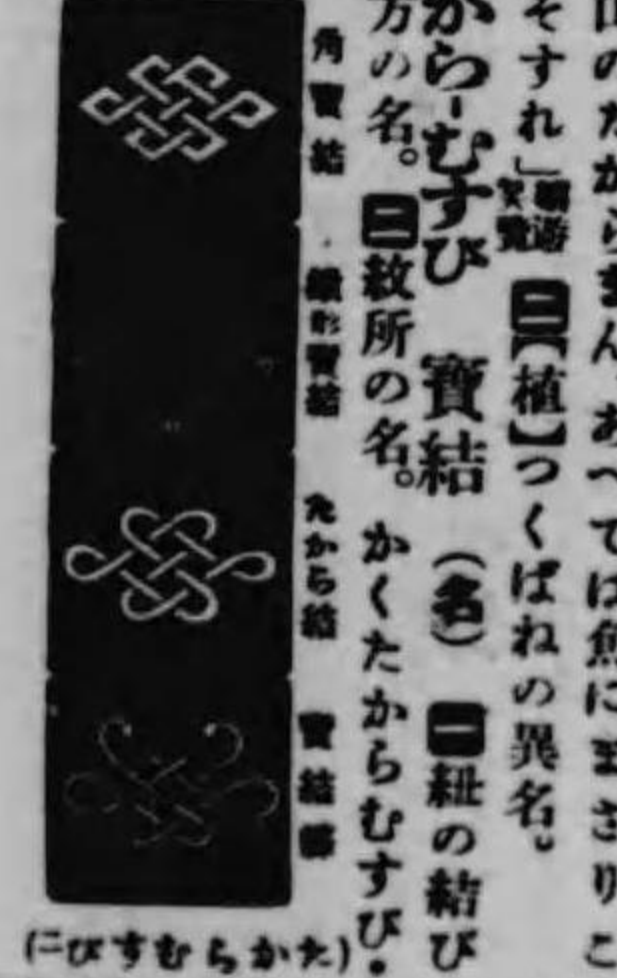
たから(タカラ) 寶君 大事と思ひ奉る主君。大切な主君。榮華貴族我が寶の君は、いづこにあらめさせ給へるぞや。大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りにそ待らね」



(にしくづらかた)



(ひがらかた)



(にびすむらかた)

たから

たから(タカラ) 寶君 大事と思ひ奉る主君。大切な主君。榮華貴族我が寶の君は、いづこにあらめさせ給へるぞや。大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りにそ待らね」

たから

たから(タカラ) 寶君 大事と思ひ奉る主君。大切な主君。榮華貴族我が寶の君は、いづこにあらめさせ給へるぞや。大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りにそ待らね」

たから

たから(タカラ) 寶君 大事と思ひ奉る主君。大切な主君。榮華貴族我が寶の君は、いづこにあらめさせ給へるぞや。大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りにそ待らね」

たから

たから(タカラ) 寶君 大事と思ひ奉る主君。大切な主君。榮華貴族我が寶の君は、いづこにあらめさせ給へるぞや。大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りにそ待らね」

たたく

なるさまをなす。神代紀有鶴鶴飛來、...

たたくも わたす 敬波 そこそこ...

たたくれ (名) たたくれること。たたく...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく

たたく 狸 (名) 狸のたたく狸の異名。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

たたく

たたく (自動) たたく (名) たたくこと。...

ただよーただら

ただよはしき 漂 (名) ただよはしき... ただよはしき 漂 (他動) 漂ふやうにす...

ただよはしき 漂 (自動) 浮かびて搖... ただよはしき 漂 (名) 築城法の...

ただよはしき 漂 (名) 二十八宿の一... ただよはしき 漂 (名) 古語。ただら...

ただよはしき 漂 (名) 古語。ただら... ただよはしき 漂 (名) 古語。ただら...

たたり

たたり 金を湯水の如くつかふ豪奢なる人... たたり 榎木を支ふる短き柱、即ち、束の稱...

たたり 榎木を支ふる短き柱、即ち、束の稱... たたり 榎木を支ふる短き柱、即ち、束の稱...

たたり 榎木を支ふる短き柱、即ち、束の稱... たたり 榎木を支ふる短き柱、即ち、束の稱...

たたり 榎木を支ふる短き柱、即ち、束の稱... たたり 榎木を支ふる短き柱、即ち、束の稱...

たたわ

たたわ 立ちてあり。萬... たたわ 立ちてあり。萬...

たたわ 立ちてあり。萬... たたわ 立ちてあり。萬...

たたわ 立ちてあり。萬... たたわ 立ちてあり。萬...

たたわ 立ちてあり。萬... たたわ 立ちてあり。萬...

たち

たち ともなくただ渡りなん... たち ともなくただ渡りなん...

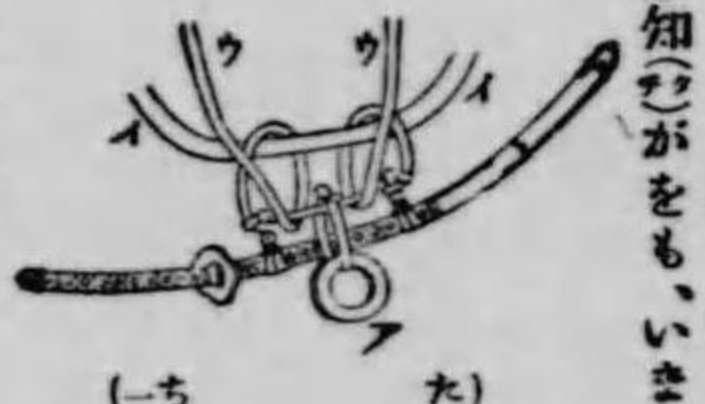
たち ともなくただ渡りなん... たち ともなくただ渡りなん...

たち ともなくただ渡りなん... たち ともなくただ渡りなん...

たち ともなくただ渡りなん... たち ともなくただ渡りなん...

たちーたち

もの。たて。平家(源氏)兵衛佐の館へ... たち 太刀 (名) 断ち切る義...



たち 太刀 (名) 断ち切る義... たち 太刀 (名) 断ち切る義...

たち 太刀 (名) 断ち切る義... たち 太刀 (名) 断ち切る義...

たち 太刀 (名) 断ち切る義... たち 太刀 (名) 断ち切る義...

たちあ

たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」... たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」...

たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」... たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」...

たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」... たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」...

たちあ

たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」... たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」...

たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」... たちあ 雄略紀「元帥等」仁賢紀「同伴者」...

たちい

たちい 立つこととあ... たちい 立つこととあ...

る物。禁忌の食物。七十一番歌合醫師。あはれ我が戀の病ぞ薬なき、うき名ばかりのたちものにして

たちもの 裁物(名) 布帛また紙など、裁ち切るべき物。又、裁ち切るわざ。たちもの 建物(名) たてもの(建物)に同じ。

たちものいた 裁物板(名) 裁ちものをなすに用ふる板。たちものばらちやう 裁物庖丁(名) 裁ちものするに用ふる刃の廣く圓き庖丁。

たちものみち 立紅葉(名) 故所の名。たちものやく 立役(名) 芝居にて男形に扮する者の稱。大夫の對。若風俗三原十太夫中など、皆根強き立役勤めけるが、人倫調蒙爾業と立役。一切男の役をなすを立役といふ。

たちものちやう 立休(自動) やすらふ。たちものちやう 立休(自動) やすらふ。たちものちやう 立休(自動) やすらふ。たちものちやう 立休(自動) やすらふ。

たちものちやう 立休(自動) やすらふ。たちものちやう 立休(自動) やすらふ。たちものちやう 立休(自動) やすらふ。たちものちやう 立休(自動) やすらふ。

を望めば数星の相接近せる星の稱。其二箇接近せるものを二重星、三箇接近せる者を三重星と云ふ。

たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。

たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。

たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。

たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。

たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。たちゆき 立行(自動) 立ちゆくこと。

ぬること。たちじに。大磯虎推物語「忍辱・慈悲の衣川、立往生に立つ波は」

たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。

たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。

たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。

たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。

たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。たちわ 立別(自動) わかる。

立ちて居ること。立ちたり居たりすること。立ち居ること。萬立座

たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。

たちん 立居(自動) 立ちて居る。

(藤)他人の空似 血族の關係なくして、容貌などの偶然によく似たること。
 (藤)他人の中を履む 世情に通ずるなどのため、他人の中に交はる。
 (藤)他人の飯を食ふ 家を離れて他人の處に奉公す。世間の經驗を嘗む。
 (藤)他人の弓を挽かざれ 主あるものに手を出だす勿れ。漢語大和故事「他人の弓を挽かざれ」鑑古録「妙喜曰、他弓莫挽、他馬莫騎」
 (藤)他人の別れ梅の端 夫婦などの離別せし後は全く他人となりて、木屑の如く顧みざること。
 (藤)他人はこはいもの 人の心は測り難く、險惡にして恐るべきもの。
 (藤)他人は時の花 他人は一時の花の如く、永久には頼むべからざること。釋迦如來一代記「これ見給へや夫婦の人、他人は時の花なれば、親は誠のせんなりとは」
 (藤)たにんあつかひ 他人扱 (名) 親族の人を情愛なく他人と同様に扱ふこと。疎外すること。
 (藤)たにんざやうき 他人行儀 (名) 親密ならざる他人に對する如き待遇。
 (藤)たにんず 一人多數 (名) 多くの人。多數の人。おほぜい。衆。
 (藤)たにんづきあひ 他人附合 (名) 普通通の交際にて、親戚間の如き特別の情愛なきこと。
 (藤)たにんむき 他人向 (名) 他人同志の如き、情愛なきさま。生玉心中主人が見る目俾りて、他人向きなる折柄に「鶏衣冠」風雅に吹ひ寄りの他人向きを離れ」
 (藤)たにんやど 他人宿 (名) 親戚に非ざる普通の他人の宿屋。浮世風呂当

人宿に雑用を拂つてまごついて居るには増しだから、居てやるんだなんぞと太平樂さ」
 (藤)たぬき 手貫 (名) こて(籠手)と同じ。和名「猪手」
 (藤)たぬき 狸 (名) 狸動物中、食肉類の一種。形狐に似て小きし。眼邊は白色にて、鼻邊は黒色なり。全身に暗灰色の毛を被り、たまに黒褐色の長毛を混じ、尾は太くして房状をなす。夜間出てて食を求む。我が國の各地に産すれども、東南諸島・沖繩以南には産せずと云ふ。肉は食ふを得べきも臭氣あり。毛は筆を作り、皮は防弾用に供す。和名「狸」多量捕獲爲害也。平家六郎源盛に、狐たぬきのしわざにてぞあるらん」名義抄「狸のくさむらじ」
 (藤)たぬき 狸の四足 庭訓往來「狸のくさむらじ」
 (藤)たぬき 狸の四足 庭訓往來「狸のくさむらじ」
 (藤)たぬき 狸の四足 庭訓往來「狸のくさむらじ」
 (藤)たぬき 狸の四足 庭訓往來「狸のくさむらじ」

(藤)たぬきの念佛 永く續かざること。嘲りいふ語。
 (藤)たぬきくま 狸隈 (名) 芝居の役者の隈どりの一種。
 (藤)たぬきじり 狸汁 (名) 狸の肉を味噌汁にて煮たるもの。古くは酒の糟などにて焼皮を料理したるもの。狸汁料理物語、狸汁。野はしり皮をばく、みたまきは、やきつきよし、味噌汁にて仕立て候、妻は大こんごばう其の色色、すひ口にんにく、だし酒鹽」
 (藤)たぬき 狸爺 (名) 狡猾なる老人を罵りていふ語。唐船嶺今國姓爺「狸爺め、通さぬ」
 (藤)たぬきねいり 狸寝入 (名) 眠りたる風をよそふこと。空ねいり。そらねいり。浮世物語「たぬきねいりをして居たるものあり」吉野郡女捕頭はて手の悪い狸寝入り、酒代早うと揺り起こす」
 (藤)たぬきねいり 狸眠 (名) 前條に同じ。節用「貉睡」
 (藤)たぬきねいり 狸眠 (名) 前條に同じ。
 (藤)たぬきはばあ 狸婆 (名) 狡猾なる老婆を罵る語。織留「引く手になびく狸はば」
 (藤)たぬきばえ 狸笛 (名) 玩具の一種。狸の形の蓋に最も簡単な風琴の装置ありて、伸縮して鳴らす。
 (藤)たぬきまめ 狸豆 (名) 狸豆科、たぬきまめ属の一年生草本。莢の高さ一二尺。葉は



(久ぶきぬた)

五生、披針形葉面は深緑色にして毛なく、葉背は淡くして莖と共に纖毛を生ず。夏秋の候、莖頭に淡紫色の多くの花を密生す。我が國、原野に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。ねこまめ。野百合。たぬきも 狸藻 (名) (植) 狸藻科、たぬきも属の水生草本。莖は細長にして絲の如く、葉は五生絲狀にして、多数の枝を有し、枝の節所に小囊を具へ、小蟲を捕獲す。夏目、葉腋より高く花梗を抽き、黄色の唇形花冠を有する花數筒をつく。我が國、池澤・水田等の流動少なき淡水中に自生す。ひえも。水豆兒。
 (藤)たぬきもくわ 狸藻科 (名) (植) 狸藻科、雙子葉類の科。水中、湿地又は岩石上に生ずる草本。根は往々缺如す。莖は細長、枝を有するが、或は甚だ短し。花莖は常に直立す。葉は全邊、分裂せず、或は細裂す。花は不整齊にして兩性。萼は二裂乃至五裂す。花冠は唇形。雄蕊は二箇稀に五箇、雌蕊は二心皮の結合せるものにして、一室の上位子房を有す。胚珠は多数あり。果實は蒴、種子には胚乳なし。たぬきも、むしとりすみれの類は之に屬す。此の科の植物は温熱帯に産す。
 (藤)たぬきらん (名) (植) 莎草科、麥類に屬する多年生草本。莖の高さ一尺餘に達す。葉は細長、幅二分許りあり。初夏梢上に三四箇の細穂を出だして花穂を生ず。穂は單性、上方一箇は雄花穂にして、下方の數箇は雌花穂、何れも比較的大形にて、狸の尾に似たり。我が國、深山に自生す。夫



(もきぬた)

木等早苗とりおのが作らぬ秋の田を、かりにきぬとや田ぬし替めん」
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。

ね」吉野忠信「此の儀を梶原種ととり、萬端過ぎせしむるなり」
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。

八十八號種牛牧場官制「種牛牧場」
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。

の數などを豫言して賭事(たぬし)をなし、切り割りて勝負を決すること。南畝秀吉「近頃市中の者、柿をきりて、その種の數をあたてて勝負を懸る事ありき。名づけてたぬしが」といふ」
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬし 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。



(しぬた)

たぬき (名) 草木の芽を生ずる基となるもの。神代紀「以(樹種)を而下」宇津保集「はら(す)とも、うちまきよにべい」
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。

たぬき (名) 草木の芽を生ずる基となるもの。神代紀「以(樹種)を而下」宇津保集「はら(す)とも、うちまきよにべい」
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。

たぬき (名) 草木の芽を生ずる基となるもの。神代紀「以(樹種)を而下」宇津保集「はら(す)とも、うちまきよにべい」
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。

たぬき (名) 草木の芽を生ずる基となるもの。神代紀「以(樹種)を而下」宇津保集「はら(す)とも、うちまきよにべい」
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。
 (藤)たぬき 樂 (名) たぬし(樂)と同じ。

たねせーたねは

たねん

たのこ

たのし

たねせん 種銭 (名) 銭を鑄る時鑄型

たねたき 種卵 (名) 種取りのた

たねちがひ 胤達 (名) たねがはり

たねつけ 種附 (名) 同じ長き種類

たねつけばな 碎米齋 (名) 植子

たねとり 種取 (名) 子を殖やすた

たねとり 胤鳥 (名) 子を殖やすた

たねなし (名) 植うきくさ(水萍)の異

たねなすび 種茄子 (名) 種をとる

たねはら 胤腹 (名) 父と母と。父

たねん 種版 (名) たねいた種板

たねふくべ 種瓢 (名) 種を取るため

たねほん 種本 (名) 著作・講義又は

たねまき 種時 (名) 種を蒔くこと

たねまきとり 種時鳥 (名) 動く

たねもの 種物 (名) 草木の種。た

たねのちや 種物屋 (名) 種物を商

たねん (他念) (名) ほかの思念。ほ

たねん (他年) (名) ほかの年。將來

たねん (多年) (名) 久しき年月。多

たねん (多年) (名) 植植物

たねん (多年) (名) 植植物

たねん (多年) (名) 植植物

たねん (多年) (名) 植植物

たねん (多年) (名) 植植物

たねん (多年) (名) 植植物

たねん (多年) (名) 植植物

たねんせい 多年生 (名) 植植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たねんせいさつほん 多年生草本

たねんせいしよくぶつ 多年生植物

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのし (名) 動たにし(川螺)の訛り

たのしーたのみ

たのみ

たのみ

たのむ

が極度になりて哀しみが出でくる。平

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

たのしみ 樂 (自動) たのしく思ふ。

器致證三山... 宇治田原焼之義、田原郷其の外段段承り合せ候得共一切相分かり申す候

たばり 東把 (名) たば(東)に同じ。泉鏡記「租稻二東二把り」天武紀「麻一俵り」

たばら 戲狂 (自動) たはむる。たはく。あざる。萬ちうしなひ寄りてぞ、いもは多波禮のたりける

たはる 廻 (自動) たは接頭。廻る。めぐむ。本義 萬色深くせながらもは染めましを、み坂多婆良のばまさやかに見む

たはる 賜 (他動) たまはる(賜)の約。萬玉に貫き消たす賜良む、秋萩のうれわら葉における白露

たはれぬ 戯事 (名) たはれたる事。たはむれごと。萬いさ子ども多波和射

たはれぬ 戲 (名) たはること。たはむれ。戯 (名) たはること。たはむれ

たはれぬ 戯歌 (名) きやうか(狂歌)に同じ。夫木はたはれ歌とよみける中に

たはれぬ 戯草 (名) 植下もぎ(芝)の異名。新六帖「冬しけの霜をいただくつくも笑見えし筋なきたはれ草かな」

たはれぬ 戯言 (名) たはむれごと(戯言)に同じ。右京大夫集「かしもたはれごとやうなりしを、程へて忘れぬ」

たはれぬ 戯駒 (名) あてどもなく遊ばるる駒。夫木草しげあははづの野邊のたはれ駒、よはに嘶ゆる聲聞ゆゆなり

たはれぬ 戯名 (名) たはれたる名。みだりがはしき評判。うきな。曾丹集「遠つ山宮城が原の萩見ると、秋ははかなきたはれ名ぞたつ」

たはれぬ 戯寝 (名) たはれたるかりね。夫木草わきも子が衣うすれて見えしより、たはれぬせじと思ひそめてき

たはれぬ 遊女 (名) うかれめ。あそびめ。見えたるはれめが、舞ばかりこそ舞に隠れぬ

たはれぬ 遊男 (名) 遊蕩なる男。放蕩も。和名「蕩子」瀬川百首「たはれぬを、戯男(名) 遊蕩なる男。放蕩も」

たはれぬ 遊事 (名) たはれたる事。たはむれごと。萬いさ子ども多波和射

たひ 鯛 (名) 鯛魚類中、硬骨類の一種。體は側扁形にて側扁。口は水平に開き小きく、鱗は上下頸にのみ生じ、鱗は大にして櫛状をなす



たひ 鯛 (名) 鯛魚類中、硬骨類の一種。體は側扁形にて側扁。口は水平に開き小きく、鱗は上下頸にのみ生じ、鱗は大にして櫛状をなす。性肉食にして、小魚、甲殻類、貝類等を食す。かすごどひ。ななれ。ひ。高等の類あり。まだく。萬あみづの江の浦い。鳥の子が、鯉釣りに鯛

たひ あかへす 度返 薄の二反三反も濃く置くことなるべし。たひ ごと 度毎。其の折り毎。其の時いつも。其の都度。村人の額に取れども、あなをかきめづらしとこそおほゆれ。鯛見奉るたひごとにめづらしからんを、いかがはせん

たひ 文字を句の上にするまで、旅の心をよめといひければ

たひ のこし 旅御所 旅中に宿泊する貴人の館舎の尊稱。東鑑「三月廿六日、將軍家於旅御所、有御遊宴等」

たひ のころも 旅衣 たびごろも 旅衣に同じ。萬草まくら旅の衣の紐解けぬ、おほせも此の年頃にして、萬「ひくまぬに句ふはり原入り亂り、衣にははせ多鼻能知師(師)に」

たひ のそら 旅空 旅さきの土地。たびどころ。多くたよりなく心細きまなどいふ。竹取「旅のそらに助くべき人もなき所に、いろいろの病ひをして」源「ましてたびの空は、いかに御心づくしなること多かりけん」

たひ のたもと 旅杖 旅中の杖。旅ごろも。大鏡「若紫の指衣、旅の杖に脱ぎかへて、身はいつの間に賤の女と」

たひ のまくら 旅枕 くらまくら草枕に同じ。たひのまるね 旅丸寝 旅路にて假寝をすること。萬「草まくら多批乃麻流(流)の紐絶えば、我が手が手と附ける此れ(の針)持さし」

たひ の宿を貸して下され 一夜の宿を貸して下され

たひ のやかた 旅館 たびやかた 旅館に同じ。拾玉「雨はれぬ旅のやかたに日数へて、都懸しきう雲の空」

たひ のやどり 旅宿 たびやどり 旅宿に同じ。萬草「沖よりふな人のぼる呼びよせて、いさ言げやらむ多神能也登里(里)に」

たひ のよ 旅夜 旅行中の夜。萬草「旅の久しくなれば、さにつらふとさきけず懸ふる此の頃」

たひ のつかひは有り合せ 旅先にて金子の入用ある時は、有り合せの金を一時流用すべし。太平記「忠臣講釋、旅のつかひは有り合せとやら、親手の中で金銀の無心は、どうやら言ひにくけれど」

たひ の恥ぢはかき蓋て 旅行中の不面目は、さしたる恥ぢとならず。箱根草「旅の恥ぢはかき蓋て、とはいふが、まだここは恥ぢたせ」

たひ の恥ぢはかき蓋て 旅行中の不面目は、さしたる恥ぢとならず。箱根草「旅の恥ぢはかき蓋て、とはいふが、まだここは恥ぢたせ」

たひ の恥ぢはかき蓋て 旅行中の不面目は、さしたる恥ぢとならず。箱根草「旅の恥ぢはかき蓋て、とはいふが、まだここは恥ぢたせ」

たひ の恥ぢはかき蓋て 旅行中の不面目は、さしたる恥ぢとならず。箱根草「旅の恥ぢはかき蓋て、とはいふが、まだここは恥ぢたせ」

たひ の恥ぢはかき蓋て 旅行中の不面目は、さしたる恥ぢとならず。箱根草「旅の恥ぢはかき蓋て、とはいふが、まだここは恥ぢたせ」

たひ の恥ぢはかき蓋て 旅行中の不面目は、さしたる恥ぢとならず。箱根草「旅の恥ぢはかき蓋て、とはいふが、まだここは恥ぢたせ」

たひ の恥ぢはかき蓋て 旅行中の不面目は、さしたる恥ぢとならず。箱根草「旅の恥ぢはかき蓋て、とはいふが、まだここは恥ぢたせ」

たひ あきなひ 旅商 (名) 各地を巡りて商賣すること。又其の人。行商。たひ あきんど 旅商人 (名) たびあきんど(旅商人)に同じ。きうと(旅商人)に同じ。たひ あみ 鯛網 (名) 鯛を捕らふるに用ふる網。多くは手繰網を用ふ。日本山海名産圖會「他州鯛網」

たひ ありき 旅歩 (名) たびをするこころ。りよから。榮華衰ふかかるとありき見苦しと殿のおまへ申させ給へば、今鏡「天和の方にたびありき日比に」

たひ ありき 旅歩 (名) 前條に同じ。浮世床「立派にして通るものは旅歩たひはせずと、江戸に座居つて事をすはさし」

たひ いし 磯 (名) つぶて、小石。靈異記「磯(磯)に磯(磯)」。たひ いでち 旅出立 (名) 旅の支度。たびでち。旅裝束。旅裝。傾城島原姓合戦「旅いで立ち結縁やかに」

たひ うち 旅人 (名) たびと(旅人)の音便。太平記「旅装束、磯かに郎從百餘人を行きつれたる旅人の様に見せて」

たひ かし 旅毒 (名) 旅行中に感染したる毒。たひ かす 度敷 (名) 回数。どすら。たひ かげき 旅隊 (名) 他郷へ行ってかきごと。でかせき。たひ がらす 旅鳥 (名) 他郷より来たる人を嘲りいふ語。泊船集「旅鳥古巢は梅になりけり」ものと水「旅がらす二十日も船支度」

たひ きせる 旅烟管 (名) 旅行用の器具。若風俗「七日夜走りけはしく、假宿に旅烟管など忘れて、本意なし」

たひ けせ 旅癖 (名) 旅行をするこころ。旅行くせ。烟霞の癖。もとの水「旅癖や寒冷煩秋の山」

たひ けせ 旅癖 (名) 旅行をするこころ。旅行くせ。烟霞の癖。もとの水「旅癖や寒冷煩秋の山」

たひ けせ 旅癖 (名) 旅行をするこころ。旅行くせ。烟霞の癖。もとの水「旅癖や寒冷煩秋の山」

たひ けせ 旅癖 (名) 旅行をするこころ。旅行くせ。烟霞の癖。もとの水「旅癖や寒冷煩秋の山」

たひ けせ 旅癖 (名) 旅行をするこころ。旅行くせ。烟霞の癖。もとの水「旅癖や寒冷煩秋の山」

たびとたびれ 旅草臥(名) たびづ
かれ旅草に同じ。五人女、旅くたびれ
の夢むすびけるに。

たびひるま 鯛車(名) 小兒の玩具。
はりこ製、鯛に車をつけて曳くやうにし
たるもの。

たびけいしや 旅藝者(名) 旅かせ
ぎをする藝人。

たびけいにん 旅藝人(名) 旅かせ
ぎをする藝人。

たびこさやう 旅興行(名) 他郷
を巡りありきてする興行。旅先にする
興行。

たびこち 旅心地(名) 旅にある
心地。たびこち。旅情。古今集「秋の
山紅葉をぬきとむくれば、すむ我れさ
へぞ旅こちする」

たびこころ 旅心(名) 前條に同じ。
拾玉、動きなき君が御幸に馴れ馴れて、
旅心せぬうち山かな。旅心筑紫
の海の船出して。

たびこじき 旅食(名) たびをして
人の懐みを乞ひあくる食。鴨衣、旅月
一つはしやほしやと旅食。

たびこち 旅衣(名) 旅にて着る衣
服。客衣。萬多比呂母衣、やつ者重
ねていぬれども、なほはだ寒しいもし
あらば、新古今、秋ぎりのたつたび衣
おきて見よ、つゆばかりなるかたみなり
とも。

たびさき 旅先(名) 旅行さき。旅行
中。

たびさし 足袋刺(名) 足袋を刺し
作ること。又、其れを業とする人。

たびし 足袋師(名) 足袋を製造す
る人。人倫、脚圖、足袋師。

たびし 茶毗師(名) 死體の火葬を
たぐ。

たびと 農夫。榮華、田人どものうたふ
歌。

たびと 旅人(名) たびびと(旅人)の
略。推古紀「こやせる其の多比等、あは
れ」萬三、家なれば妹が手まかむ、草まく
ら、旅にこやせる此の旅人、あはれ。

たびと 旅所(名) 旅すまひ。旅
の中どり。旅舎。源、例ならぬたび所な
れば、いたうしのび給ふ。同、里かかると
どころともなく、人さわがしけれども
たびとに記。旅行日記に記す
日記。旅行新選、旅日記に雨と
紅葉と並べたり。

たびと 旅日記(名) 前條に同
じ。

たびと 旅寝(名) 旅にて寝ること。
たびのやどり。旅宿。萬三夕霧に衣は濡
れてくさ枕、旅宿、かもするあはぬ君ゆ
え。後撰、岩の上に旅寝をすればいと
寒し、昔の衣を我れに貸さん。

たびと 旅宮(名) たびしよ旅
所に同じ。

たびと 旅のむこけんばち(名) 動まつかさ
うを松穂魚の異名。

たびと 鯛餅(名) 動ゆむし(鮓
の異名)。

たびと 旅羽織(名) 旅行する
時に着る羽織。傾城、反魂香、越前の國氣
比の浦へと旅羽織。

たびと 旅箱(名) 旅行に携帯する
箱。二代男、其の子は土踏まず三枚用、
前に旅箱、後に紫の箱入。

たびと 旅始(名) 旅立ちの始
め。若風俗「旅はじめの喧嘩、名残の
委を見送り」

たびと 足袋跣足(名) 履物を
はかず、足袋だけにて地上を歩み行くこ
と。

たびと たびは

たびしかはら 礫瓦(名) 小石と瓦
の消えぬばや、岩の中より水のわくらん
たびしかはらといふとも。日數にもあ
らぬ賤き者。元輔集、みぐらん玉の光
をたのむかな、歌にもあらぬたびしか
らを。枕、女房のすんざも、その里よ
りくるものども、をさめ。みかはやうど
たびしかはらといふまて。源、生たびし
かはらなどまで喜び思ふなる、御位改ま
りなどするを。

たびしたく 旅支度(名) 旅行の準
備。又、旅中の服装。たびしやうぞく。
たびしはら 旅芝居(名) 旅興行を
する芝居。旅にて興行する芝居。一代男
「是れは藤村一角が旅芝居と、聲立てて
呼びぬ」

たびしやう 旅商(名) たびしやうに
ん(旅商人)の略。

たびしやうぞく 旅装束(名) 旅行
する時の衣服。旅のいでたち。旅支度。
宇治拾遺、旅装束しながら手洗ひて、後
の堂に参りて。武林往昔日記、旅装束に
て、馬大方向に乗る人も。

たびしやうにん 旅商人(名) たび
あきうと旅商人に同じ。

たびしよ 旅所(名) おたびしよ御旅
所を見よ。

たびしよ 茶毗所(名) 茶毗をする
所。火葬場。東鑑、旅人、武衛御哀傷
之余、令向其茶毗所給。

たびすがた 旅姿(名) 旅行に出で立
つ姿。旅装束のすがた。源、扇屋より、
里はづれ出でたるたびすがたどもの、い
るいろのあをのつきぎきぬひもの、く
りぞめのさまも。諸、いままだ習はぬ

たびはばき 旅腰巾(名) 旅する時
にはく腰巾。又、腰巾をはきて旅行する
こと。吉野郡女補、これやさは都にぬ
旅腰巾、千歳坂の坂と詠せしも。

たびはら 田雲雀(名) 動鳥類中、
燕雀類の一種。體形はりに似るも小
し。全身灰黒色にて、胸は黄白色に黒色
の斑點を交ふ。いなび。いなび。いなび
ばり。いなび。たどり。

たびひしほ 鯛餅(名) 鯛の肉にて
敷したるひしほ。字、鯛餅。又、
たびびと 旅人(名) 旅路にある人。
旅行し居る人。たびと。旅人。旅客。
萬三、客人の宿りせむに霜ふらば、わ
が子はぐくめあめの鶴むら。枕、扇中、
つ方は中旅人のあるところ。和名、旅
客(旅人)。

たびはら 旅臥(名) たびね(旅寝)に
同じ。千五百番歌合、これやさは都にぬ
たびね 旅舟(名) 旅さきにて乗る
船。旅客の乗る船。客舟。諸、誰れに
ゆくへを遠江、げに遠き江に旅舟の
たびね 度間(名) あひだ。ひま。間
斷。榮華、宮宮の御つかひ額りて、東
宮よりはたびねなれども。

たびまくら 旅枕(名) たびね(旅寝)
に同じ。新古今、上ほととぎす其の神山
のたびまくらほのかたらしみ空ぞ忘れ
ぬ。玉葉、たびまくらふらひの里の朝ぼ
らけ、かり田の霜にたづぞ鳴くなる。

たびまね 度遍(形) 度敷多し。
開斷なし。續紀、醍醐大造之事、一、二通
仁、無かりししるし、多婢末、久、ま
をし給ひぬ。

たびま 旅相撲(名) 旅興行を
する相撲。

たびまひ 旅住居(名) 旅先のす
まひ。客舎。

たびまひ 旅住(名) 前條に同じ。宇
津、旅、かく侍りならひて、いかにつれ
づれにおぼさん、しばしおとづれにもと
思ひ給ふれど、たびまひくるしう侍れば
なん。源、年頃ならひ給はぬたびまひ
に、せばくはしたなくては、いかでかあま
たはさばらはん。

たびまひ 旅餅(名) 鯛の肉
を磨り砕き、餛飩粉などを交じへ、煎餅に
製したるもの。

たびまひ 旅僧(名) 旅行の僧。客僧。
たびまひ 旅立(名) たびだつこと。
かどで。發足。發程。太祇全集、旅だち
を人も羨む給かな。

たびまひ 旅出(自動) 旅路に出
でたつ。旅に出づ。かどです。發足す。
諸、江口、都をばまだ夜深きに旅立ちて。同
無、旅立つ雲の朝もよひ、紀の路にいざ
や急がん。旅さききあり。旅中にあ
り。蜻蛉日記、かかるたびだちたるわだ
どもをしたりしこそ、あやしう忘れがた
うをかしかりし。枕、たびだち
たるところ、近きところなどにて、げす
ものざればかしたる。旅のいでたちを
なす。旅装をなす。蜻蛉日記、なかに立
てる人もたびだちて、狩衣なり。

たびまひ 旅度(名) しばしば。毎
度。年回。勢語、よろこびて待つに、たび
たび

たびまひ 旅廻(名) たびありき
(旅歩)に同じ。

たびまひ 調味噌(名) 煮たる鯛の
肉を乾し碎きて、砂糖などを加へ、味噌と
攪り混ぜたるもの。

たびまひ 旅路(名) たびぢ(旅路)に
同じ。和泉式部集、あはれなることをい
ふには都いでて、ゆくたびぢの遠きな
りけり。元集、たびぢみち行く人、美濃の
國とよの都といふ所にやどりて。

たびまひ 鯛餅(名) 煮たる鯛の肉
を細かくして、味噌に交じへて盛りど
り。八笑人、これが即ち鯛餅でござり
ます。

たびまひ 旅辰(名) 旅行先より還
ること。俳諧新選、初雪や疾く、に雪見
し旅辰り。

たびまひ 旅屋(名) 宿驛の旅舎。盛衰
記、旅屋、都を出でて、近江國甲賀の驛
屋に寄る。

たびまひ 足袋屋(名) 足袋を仕立て
又は賣る家。又、その人。若風俗、炭賣
の聲、踏皮屋の秋。

たびまひ 足袋(名) 足が上るといふ謎
にて、地位の危き譬。

たびまひ 多病(名) 身にやまひ多きこ
と。病氣がちなること。病身「才子多
病」晉書、病多病體羸。

たびまひ 旅館(名) 旅人の宿る
家。旅宿の館舎。りよくわん。旅宿。月
階集、霜がれの草ひき結ぶ旅やかた、し
づれもる夜は臥しぞわづらふ。夫木、う
かめゆるかたれであるくたびやかた、す
みつきがたきものにぞありける。

たびまひ 旅役者(名) たびか
せきをする役者。

たびまひ 旅瘦(名) 旅行の疲れて

たびまひ たびすねれば 枕、傍なる人していは
すれば、たびたびかたぶきて。さんたい
阿彌、さいさい(異、武、)

たびまひ 賜給(他動) (賜)びと
たまふとの重言にて、深く敬意を表はす。
たまふ。太平記、其の船是れへ寄せて
たびたまへ。

たびまひ 旅路(名) 旅行の路。行
路。旅さき。旅中。俳諧新選、見初め
る日目に旅見る旅路かな。

たびまひ 旅疲(名) 旅行のつか
れ。旅行中の疲勞。たびくたびれ。諸、
「いたはしや旅疲れ、飢えにのぞませ給ふ
かや」大、狂言、馬、旅疲れに疲れまして、
ちと眠りまして。

たびまひ 旅頭巾(名) 旅装束に
をかぶる頭巾。大井川集、山の委波のな
がめや旅頭巾。

たびまひ 旅裏(名) 旅行に携帯する
つつみもの。夫木、たびづともたるか
れいひほろほると、涙ぞおつる都思へば。

たびまひ 鯛釣(名) 小兒の玩具。鯛
などのかたちをはり、又は土にて造り、
其の口を釣をつけ、絲又は毛につけたる
竿にてこれを釣るもの。胸穿用、小刀細
工にて、馬の尾にてしかけたる鯛釣もはや
りやめば。

たびまひ 旅出(名) 旅行に出で立つこ
と。もとの水、笠の緒に柳輪ねる旅出か
な。

たびまひ 旅體(名) 旅行の體體。旅
姿。川中島合戦、御供の旅體、亂れぬ標
に御沙汰肝要。

たびまひ 旅出立(名) たびいでた
ち(旅出立)に同じ。朝城島原合戦、旅
出立せんと座を立てば、掛りとも。

たびまひ 田人(名) 田を耕作する人。

たびまひ たびせ

たびまひ たびや

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

たびまひ たびゆ

白紙の意。古昔羅馬人、蠟を塗りたる板を...

たひよー 鹽水 (名) つらら水柱をいふ...

たひよー 旅用意 (名) たびじたく (旅支度)に同じ...

たひよー 旅汚 (名) 旅行にてからだなどの汚れたること...

たひよー 族装 (名) たびしやう (族装束)に同じ...

たひら 平 (名) 高底なきこと。傾斜なきこと...

たひら 平 (名) 神代紀、立於浮渚在平處...

たひら 平 (名) 山間にある平地。たひらめんと...

たひら 平 (名) 浮世風呂、湯煮で飯を食ふ下戸と...

たひら 平 (名) 神代紀、天下大平、宇津保...

たひら 平 (名) 神代紀、天下大平、宇津保...

ひらかに國榮えてあり、源東宮の御代を、たひらにおはしまさばとのみおほし...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

の事、なほたひらぎはて給はぬにより、目怨みを解きて和親を結ぶ。和睦す。

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

こと。又其のもの。鴉合戦物語七尺には餘るらんとおぼしき未おくれに...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

たひら 平 (名) たひらごとこと。なかなほり。和睦。和親。平和。たひら...

これがたふは必ずせんずらんと、常に心づかひせらるるもをかきに、宇治拾遺...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

(薩塔は下から組め 物事は土臺を固めて後にはすべし。井蛙抄) 歌を塔を組むやうに、塔は上より組むことなし...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふ (名) 梵、そとは (skoln) の略なる塔婆 (stupa) の略...

たふしよ 一答書 (名) こたへの書面。

たふじよう 一搭乗 船、車に乗りこむこと。

たふじようしやう 一搭乗證 (名) 其所持者が船、車等に搭乗する権利ある證票。鐵道船郵便規則第四條「郵便車又は郵便船室に搭乗する者は、事務員は制服を著し又は搭乗證を携帯する者に限る」

たふす 倒 (他動) 立つてを横にする。伏す。ねかす。宇津保集「この林より西に木をたふす斧の聲、遙かに聞ゆ」

たふせ 田伏 (名) 田の中のふせや。田の中の假庵。萬、しかとあらぬ五、百の小田を刈り、田、塵、まに居れば都しもほゆ、同、か、る、う、す、は、田、塵、ま、の、許、に、吾、が、兄、子、は、に、ふ、ぶ、に、ま、み、て、立、ち、ま、せ、り、見、ゆ」

たふせら 一踏青 (名) たらせ(踏青)に同じ。蘇軾文「有亭樹松竹、下臨大江、每正月八日、士女相與遊、飲酒於其上、謂之踏青」

たふたぶと 一答書 (名) こたへのふみ。返答の文章又は文書。たふたぶと 一答辯 (名) 答辯すること。こたへ。ひひらき。たふたぶと 一答辯者 (名) 答辯する人。

たふたぶと 一答辯書 (名) 答辯の行を記載したる文書。たふたぶと 一答辯 (名) 石摺りの遺帖などの稱。徐浩古跡記「搨本大行、於世二たふたぶと」

たふたぶと 一答問 (名) 土地の反別等を檢して、莊園公領に於ける田畠等の數額及び本所、領家、地頭、の氏名等を注進せしめたる帳簿。檢地帳。水帳。東鑑九文、年二品令、求、奥州羽州兩國省帳田文、下文書、給、北條九代記、源、將軍家には諸國の田文を召し出だされ、源姓に仰せて勘定せしめ

たふたぶと 一答問 (名) 人の問ひに答ふること。又、問ひたり答へたりすること。梁書、制、毛詩、答問、春秋、答問、並、正、先儒之、迷、開、古、聖、之、旨

たふたぶと 一答揚 (名) たいやう(對揚)に同じ。書經、變、和、天下、用、答、揚、文、武、之、光訓

たふたぶと 一答揚 (名) たいやう(對揚)に同じ。書經、變、和、天下、用、答、揚、文、武、之、光訓

たふたぶと 一答揚 (名) たいやう(對揚)に同じ。書經、變、和、天下、用、答、揚、文、武、之、光訓

たふたぶと 一答揚 (名) たいやう(對揚)に同じ。書經、變、和、天下、用、答、揚、文、武、之、光訓

たふと ぶと肥えて、うつくしままみのほど、母君によく似給へる風

たふたぶと (名) 湯又は水などをいふ。浮世風呂と手桶でたふたぶとを汲んで、同、写、じ、つ、として這入つてお出でよ、ぼちやぼちやをすると、たふたぶとがはねます

たぶと 一他物 (名) 外のもの。他物のもの。漢書、復、使、射、他、物、連、中、輾、船、一、吊、一、他、人、の、所、有、物、

たぶと 一駝物 (名) だもの(駝物)に同じ。漢書、復、使、射、他、物、連、中、輾、船、一、吊、一、他、人、の、所、有、物、

たぶと 一陀佛 (名) あみだぶつ(阿彌陀佛)の略。たぶと 一自動 (名) 水などたぶとぶとぶと。衣服など、身體に適合せずしてたぶとぶと

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たぶと 一他物權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。たぶと 一他物上權 (名) 他人の所有物の上に存する物權。即ち地上權、水小作權、質權、抵當權の類。他物上權。

たふと 任集「傳へつあなたふともいふ人の、その人ごとくしくことぞなき」

たふと 一尊氣 (名) たふとききま。たふとさう。榮華、哀れに美しうたふとげにおはす。著聞、此の山伏、あらたふとげにおはするものかなとて、其の日は歸りぬ

たふと 一猥蕪 (自動) 自ら尊大にする。宇津保集「あなふと、天女の行末の子にこそおはしけれと、たふとびて曰はく、源、こよなうたふとび給ひて」

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふと 一尊貴 (名) たふとくあるさま。たふときき度合。萬、さかみづき榮ゆる今日、今日、たふとさや、枕、説、經、師、は、顔、よ、き、つ、と、ま、ら、へ、た、る、こ、そ、そ、の、説、く、こ、の、た、ふ、と、さ、ま、お、ほ、ゆ、れ

たふは 身分卑くして高貴の人に交際し得るは、詠歌の御座なり。吾吟我歌、歌の徳よ尊からぬぞ、高貴にまじる竹の園生は

たふは 一尊貴 (他動) 次條に同じ。宇津保集「あなたふと、天女の行末の子にこそおはしけれと、たふとびて曰はく、源、こよなうたふとび給ひて」

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たふは 一尊貴 (他動) あがめ重んず。敬びて大切にす。たふとぶ。たつとむ。萬、世、の、人、の、貴、は、願、ふ、七、く、の、寶、も、我、れ、は、何、せ、む、に、同、こ、こ、を、し、も、あ、や、に、多、敷、刀、美、し、う、れ、し、け、い、よ、よ、思、ひ、て

たまのかんざし 玉簪 玉にて飾りたるかんざし。又、玉の如く美しきかんざし。拾遺外傳をみなへしをるも惜しまぬしら舞の、たまのかんざしをかさまにせん。諸書玉の簪、舞の袂、風に翻引く瑞雲に乗じ。

たまのかんばせ 玉顔 たまのかほばせ(玉顔)に同じ。

たまのかんむり 玉冠 たまのかうぶ(玉冠)に同じ。大織冠。忠臣の頭には紙の頭巾も玉の冠り。

たまのき 玉木 玉にて飾りたる如き美しき木。花林院歌合「玉の木に杵の杜もなりけり、ふる白雪の消えぬ限りは」

たまのきざはし 玉階 ぎよくかい(玉階)に同じ。諸書玉の階、金銀を磨きて輝けり。

たまのくづ 玉屑 ゆき雪の異名。

たまのこし 玉興 貴人の乗る興の美稱。富貴なる身分。「氏なくして玉のこし」

たまのこすゑ 玉栴 玉にて飾りたる如き美しきこすゑ。松風村雨東帶録「山は金色、巖は琉璃園には玉の栴を連ね」

たまのこてん 玉御殿 玉にて飾りたる御殿。玉殿。諸書玉も輝く玉の御殿に、光を添ふる氣色かな。

たまのころも 玉衣 珠玉にて飾りたる衣。うつくしき衣。爲忠百首より「なる板ま霞のなかりせば、玉の衣をきてねましや」

たまのこゑ 玉聲 玉のうらはしき音聲。又、うつくしき詞章。月詠集より「毎に光さすめることのは、玉のこゑせしたぐひとぞ見る」夫木玉のこゑ

跡に残るたまのこゑ、いかにも寒き秋の頃かな。玉(鈴)の異名。たまのさかづき 玉盃 ぎよくかい(玉杯)に同じ。爲忠百首「思ふどちかりばの小野にまど居して、さしこそかはせ玉の盃」徒然草「よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の厄の底なき心地ぞすべし」

たまのさき 玉棹 さきを等(玉の棹)に同じ。盛衰記「玉の棹の錦の錦を帆に上げて」

たまのすがた 玉姿 玉の如くうつくしきすがた。玉容。萬葉「うつくしきはゆけども、あもししが多麻乃須我多(玉)は忘れせなふも」夫木玉露「ける春の柳はさほ姫の、玉のすがたを見るなりけり」

たまのすだれ 玉簾 たますだれ(玉簾)に同じ。盛衰記「玉の簾の錦の茵に勞り奉て、あたにも出て入り給はぬ姫君」

たまのちり 玉塵 ゆき(雪)の異名。

たまのと 玉戸 と(戸)の美稱。夫木玉の戸のひらくる今日の花、身のよるこびと成るぞうれしき」

たまのとこ 玉床 玉にて飾りたる床。うつくしき床。千載集「松が根の枕も何かあだならん、たまの床とて常のとは」

たまのとびら 玉扉 玉の如く美しき扉。諸書「我れ白髪に神ぞとて、玉の扉を押し開き、前庭に入らせ給ひけり」

たまのとほそ 玉瓶 玉の如く美しきとほそ。うつくしき家居。舟丹集「あしたに通ひたまのとはそ、ゆふべには八重むぐらにうづもれて」榮華「月黄金の車ながら寄せて、玉のとは

そをちてより此のかた」

たまのには 玉庭 うつくしき庭。夫木玉の庭の花のしらに咲けば山かつの、根も玉の庭なるなん」

たまのはこ 玉箱 玉にて飾りたる箱。うつくしき箱。たまてば玉手箱に同じ。宇津保集「わび人の涙をひるふ物ならば、袂や玉のほこにならまし」夫木玉島の子が心ゆるさぬ玉の箱、あくれどあけぬ物にぞありける」

たまのふえ 玉笛 玉にて飾りたる笛。美しき笛。諸書「夕月輝く玉座のあたりに、玉の笛のね聲すみて、月宮の昔もかくやとばかり」

たまのまがき 玉篋 まがき(篋)の美稱。夫木玉「ぬれてほす露も千とせを契りおきて、たまのまがきにうつつ白菊」

たまのぬきり 玉砌 美しき庭。玉二集「むかし見花橋のほふまで、たまの砌の荒れどかなくなり」長秋賦「君が代をのどかなくなりや水鳥も、たまの砌につばさ敷くらん」

たまのみす 玉簾 珠玉にて飾れるみす。うつくしきみす。たますだれ。伊勢集「立ちぬけりしおほ殿は、玉のみすさ(あけてけり)」

たまのみとの 玉御殿 玉にて飾りたる如きうつくしき殿。夫木玉「かたそぎや玉のみとの初霜に、まがひて咲ける白菊の花」

たまのみみ 玉宮 玉にて飾りたる宮殿。うつくしき宮殿。浦島年代記「珠の宮、貝の関、天上の浦光に應じ」

たまのみやこ 玉都 みやこ(都)の美稱。夫木玉「いさぎよき玉の都を出づる日は、わがたつ袖のひかりなるらん」

たまのみゆる 玉宮居 玉にて飾りたる如きうつくしき宮居。

たまのむらぎく 玉菊 美しく散がり立てる菊。美しき菊。榮華「うつろはで庭おもしろきはつ霜に、じころなる玉のむらぎく」龜山殿七百首「秋も植えて契りや結ばまし、とき知る露の玉の村さく」

たまのもたひ 玉懸 玉にて飾りたるもたひ。

たまのゆか 玉床 ゆか(床)の美稱。横河花集「松がねの枕も何かあだならん、玉のゆかとつねのとは」

たまのゐ 玉井 井の美稱。美しき井。新後撰集「すみそめし元の心の清ければ、濁りもはてぬ玉の井の水」

たまのさぐし 玉小櫛 玉にて飾りたる櫛。又、くし櫛の美稱。源氏集「ながらむかしを今に傳ふれば、玉のをぐしぞ神さびにける」萬代集「ゆくへなき玉のをぐしをかたみにて、猶そのかみを忘れわびぬ」

たまのさごと 玉小琴 玉にて飾りたる琴。玉の如く美しき琴。萬葉「ひざに伏す玉之小琴、おの事なくば、いとこぼくに吾が戀ひめやも」新千載集「忘れずよ手向けの庭の露とおく、玉の小琴の代代のしらべ」

たまのせと 玉男 玉の如くうつくしき男。宇津保集「我が國に見え給はぬ姿のおはするたまのをとの見え給へるは、いみじうかなしき」

たまのそと 玉男御子 玉の如く美しき男の御子。源氏集「たまのをこのみこさ(生まれ給へり)」

たままく 玉簾 玉にて飾りたる簾。萬葉「太刀のしり玉簾、山井にいつまでか、いもあひ見ず家こひをらむ」同書「梓弓すもに多麻木吉、かくすすぞ、ねななりし奥をかぬかぬ」

たままくくす 玉卷葛 葛の若葉の葉先の巻きたる玉の如きよりいふ語。一説、風吹けば葛の葉の露の亂れこぼるが、玉を播き散らす如く見ゆるよりいふ語。宇津保集「しら露に色かはりゆく秋萩は、たままくくすもかひなかりけり」奥儀抄「たままくくす、くすのかづらては、玉のやうに巻くすまればなり」

たまのる 玉居 玉がかがやきてある。玉が置きてある。源氏集「契りおかん此の世ならでもはちす葉に、たまのる露の心へだつな」後拾遺集「岩間には水のくさび打ちてけり、玉のし水も今はもりこす」

たまをいる たまあみを水に入れて、釣り得たる魚などをすくひ上ぐ。

たまをころばす 轉玉 音聲のうつくしきに響けいふ。

たまをのぶ 美しきさまに響けいふ。國姓翁「月の都の宮人の風や此の世に降る露の、玉をのべたる御姿」

國姓翁「玉ある淵は壊れず、知能の人多き國は減ぶることなき響へなどいふ。國姓翁「玉ある淵は壊れず、龍住む池は水洞れず」

たまかけし衣の裏 ころも(衣)の條、ころものうらたま(衣裏)を見よ。

たまとなつて疎くるとも、互となつて全からじ 名譽の死をすとも、不面目なる生存を深しとはすまじ。北齊書「大丈夫學可(玉碎)不能(瓦全)」

たまに響 物事の十分なる中に、一つの缺點ある響へ。源氏集「あたら御身をいかじう沈みもてなさせ給ふこそくちをしく、玉に疵あらん心地し侍れ」榮華「玉にきざつきたらんやうに見えさせ給ふ」淮南子「明月之珠、不能

「無類」論衡「以不純言之、玉有瑕而珠有瑕」

たまの暇 前條に同じ。源氏集「いとかうしもおぼえ給へるこそ心うけれと、玉のしきり覺さるる」

たまの杯底なきが如し 玉に瑕の類にて、もの足らぬ處へにいふ。徒然草「よるづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の酒盃のそこなき心ぞすべし」左思文選「且夫玉厄無當、雖寶非用」

たまの玉かざれば無光 玉は形珠せざれば良器となり難き如く、人も勉め學ばざれば完全なる人となるを得ざるに響ふ。禮記「玉不琢不成器、人不學不知道」

たまの玉かざれば無光 前條に同じ。實語「玉不磨無光」

たまの玉持つ人による 物事は身分相應なるべし。

たまを懐きて罪あり 身分不相應なる物事には、災禍を招き易きに響ふ。左傳「初虞叔有玉、虞公求之、弗許、虞而悔之曰、周諺有之、匹夫無罪、懷璧其罪、吾焉用此其以買害也、乃獻之」

たまを遺して置を留む 物の良否の鑑別なきに響ふ。韓非子「趙人有一玉、賣其珠於鄭者、爲木蘭之櫛、薰桂椒之櫛、綴以珠玉、飾以玫瑰、軒以翡翠、鄭人買其櫛、而遺其珠」

たまを遺して置を留む 生計の困難なるに響ふ。戰國策「楚國之食貴於玉、新貴於桂、中令臣食玉炊桂、因鬼見帝」

たまを以て鳥を捕つ 物多ければ貴ばれざるに響ふ。劉子新論「崑山之下以玉抵鳥、彭蠡之濱以魚食犬」香齋雜記「委鳥之人以香代、粟荆山之下、以

たま 玉抵鶴

たま 靈魂 (名) たましひ(魂)に同じ。神代紀「倉杵魂、此云宇介能美拖磨(玉)古今異聲をだに聞かてわかるたまよりも、なき床にねん君ぞかなしき」勢語「思ひぬり出たたまのあるならん、夜深く見ればたま結ばせよ」

たま 魂合 魂よく合ふ。氣が合ふ。萬葉集「あひねむものを、山田のしし田もこの母しもらすも」

たま 魂合 魂よく合ふ。氣が合ふ。同書「筑波のをてもこのももらすも」

たま 魂合 魂よく合ふ。氣が合ふ。同書「母もれども多麻木阿比(玉)ける」

たま 魂合 魂よく合ふ。氣が合ふ。同書「魂の留まり居る所。源氏集「尋ね行くまほろしもがな、つてにてもたまのありかをそこと知るべし」

たまのゆくへ 魂行方 靈魂の行きたる方。古今異聲「うつつせみからは木ごとにとむれど、たまのゆくへを見ぬぞかなしき」

たまのよどこ 靈夜殿 前條に同じ。榮華集「思ひやれ胸やはあくる音高み、たまのよどの戸をとちしより」

たまのよどこ 靈夜殿 前條に同じ。同書「ありとてや人はとらんおくりおきしたたまのよどのにそひにしものを」

たまふる 魂佩ぬの祈りをなす。古語「萬事たましひはあしたゆふべに多麻布禮(玉)ど、あが胸いたし懸のしげきに」

たままつる 魂祭 魂祭(玉)をなす。同書「たままつる年の終りになりけり、今日にや又もあはんとすらん」

たま 適偶 (名) たまさか。たまたまに出る子は風に逢ふ たまたま

たま 事なすものは失敗がちなに響ふ。(たま)たまに吹く風物に中たる 稀にある事、却て影響多し。和歌民のかまど「たまに吹く風物に中たる」

たま (名) 風の絲を遣ること。小兒の語。

たま (名) いしな(石子)をいふ、出羽國の方言。

たま (名) 欺くこと。だますこと。だまか。

だまをくはず だましをくはず。だます。逸約す。浮世床「猪を百目買つてやる管だが、此の中の魂もだまを食はした」

だま (名) 「植」あぶらざり種子樹の異名。

だま 駄馬 (名) だば(駄馬)に同じ。

だま あらね (名) 「植」虎耳草科、八仙花科の落葉灌木。幹の高さ四五尺、通常叢生す。葉は対生、長橢圓形にして先端尖り、細かな鋸齒あり。七八月頃、梢頭に球状の蕾を生じ、青紫色の花を開く。我が國、山地に自生す。ぎよくだんくわ。きんかきう。きんばいさ。

だま あられ 玉霰 (名) あられ(霰)の美稱。新撰古今集「み山べを夕越えくれば、新霰に傳ふ玉あられかな」

だま 小籠の上の玉霰、音もさだかに聞こえず」あられの形に作りたる菓子。圓形の石。石垣などに用ふ。

だま いしづみ 玉石積 (名) 石垣など、たましいしづみに積むこと。

だま いと 玉絲 (名) 玉のより細りて得たる絲。太くして節多し、精良なる織物となし難し。重に節織又は錦織に用ふ。

だま 玉蓋 (名) 美しき蓋。美

たまし 卵殻又は卵膜を有す。らん卵。目特に、けいらん(雞卵)の稱。目物事の起りはじめ。又は、たね。
たまご をわたる 渡卵 危険なる譬へにいふ。五十年忌忌念佛に狂ひ亂れ放き亂れ、亂れて明か難の卵を渡る危きの、狂女となるこそ哀れなれ。
たまご 卵を玄翁 卵を玄翁にて割ること。事の容易なる譬。
たまご 卵に目鼻 雞卵に目鼻をつけたる如きこと。少女などの顔の白く美しき譬。
たまご 卵の殻を渡る 危く覺束なき譬へにいふ。
たまご 卵の四角と女郎の顔 有り得べからざる譬。根無草「卵の四角と女郎の顔」のみならず、佛法に方便あれば、軍法に謀あり。
たまご 卵の中にも卵もあり 同じ兄弟の中にも、役に立たぬ厄介者あるなど。譬ふ。源氏鳥帽子折「玉子の中にも果も有りは、尤もかな尤もかな、親兄弟の兵に似たる方なき孫はづれ」
たまご 卵を見て時夜を求む 雞が卵の中にあらちから時を告ぐることを求む。太早計なる譬へにいふ。莊子「汝亦太早計、見卵而求時夜、見彈而求鶻矣」
たまご 卵を以て石に投ず 極めてよろこぶに譬ふ。荀子「以卵投石、以石投卵、則群臣以邪來者、猶以卵投石、以火投水」

たまご 玉子酒 (名) 雞卵の液を搾りて、吸き取らる酒。重井倚「どうぞ金の首尾なつて玉子酒飲む様に仕度い事ぢや」
たまご 玉子膏 (名) すげ(膏)の美稱。萬葉集「や蓋が中なる多麻古須氣(まご)か、我がせこ床のへだしに」千載「玉子膏なくしつやに生ふる玉こすげ、かりにのみ来てかへる君かな」
たまご 玉子煎餅 (名) 雞卵の液を原料に、油を交ぜたる煎餅。に染めたる縮布。三代男「玉子縮、紅裏理髪を縮む」
たまご 玉子煎 (名) 蕎麥などを製するに、雞卵の液を交ぜてよくつながらやうにしたるもの。
たまご 玉子手 (名) 革の名。地は卵にして之に種種の模様を印にて打ち出だし、彩色したるもの。
たまご 玉子豆腐 (名) 料理の一種。豆腐に雞卵の液をまぜて味をつけた、茶碗などに入れて蒸したるもの。
たまご 玉子綴 (名) 料理の一種。汁物に雞卵の液をかけて、汁の實を雞卵にて綴ち包みたるやうに煮たるもの。
たまご 玉子形 (名) 玉子の如き形。一節は狭く、他端は廣く楕圓形。
たまご 玉子塗 (名) 淡褐色に塗ること。又、其の塗物。
たまご 玉子吹 (名) 吹矢にて、

玉子を吹き當てたるものに景物を出だすもの。續泰平年表「嘉永元年八月十九日町觸(玉子吹)は、市中に飛出たり、其の外は、切腹せり」
たまご 玉子巻 (名) 料理の一種。薄き玉子餅にて他の料理を巻きたるもの。
たまご 玉込 (名) 鉄砲に丸を込むること。
たまご 玉子飯 (名) 料理の名。熱き飯に雞卵の液をかけてよくまぜたもの。
たまご 玉子屋 (名) 雞卵を商ふ家。又、其人。
たまご 玉子焼 (名) 料理の一種。雞卵の液に砂糖・醤油を入れて蒸きませ、鍋に油をひきて炙り焼きたるもの。玉子焼を焼く用ふる器具。普通、底淺く、形四角なる金屬製のもの。
たまご 玉子湯 (名) 雞卵の液に砂糖を加へ、熱湯を注ぎて蒸きませたるもの。
たまご 玉轉 (名) 玉を盤の上に乗せ、その當り方によりて勝敗を決する遊戯。
たまご 玉転 (名) 前條に同じ。
たまご 玉衣 (名) 玉まぎぬ(珠衣)と同じ。六條宰相家歌合、雲はれぬさつきぬらした衣、むつかしきまであまじりけり」
たまご 玉折 (名) 雞卵を入れた、折詰の箱。
たまご 玉細工 (名) 玉の細工をすること。又、其の職人。寶曆集成録

玉子を吹き當てたるものに景物を出だすもの。續泰平年表「嘉永元年八月十九日町觸(玉子吹)は、市中に飛出たり、其の外は、切腹せり」
たまご 玉子巻 (名) 料理の一種。薄き玉子餅にて他の料理を巻きたるもの。
たまご 玉込 (名) 鉄砲に丸を込むること。
たまご 玉子飯 (名) 料理の名。熱き飯に雞卵の液をかけてよくまぜたもの。
たまご 玉子屋 (名) 雞卵を商ふ家。又、其人。
たまご 玉子焼 (名) 料理の一種。雞卵の液に砂糖・醤油を入れて蒸きませ、鍋に油をひきて炙り焼きたるもの。玉子焼を焼く用ふる器具。普通、底淺く、形四角なる金屬製のもの。
たまご 玉子湯 (名) 雞卵の液に砂糖を加へ、熱湯を注ぎて蒸きませたるもの。
たまご 玉轉 (名) 玉を盤の上に乗せ、その當り方によりて勝敗を決する遊戯。
たまご 玉転 (名) 前條に同じ。
たまご 玉衣 (名) 玉まぎぬ(珠衣)と同じ。六條宰相家歌合、雲はれぬさつきぬらした衣、むつかしきまであまじりけり」
たまご 玉折 (名) 雞卵を入れた、折詰の箱。
たまご 玉細工 (名) 玉の細工をすること。又、其の職人。寶曆集成録

たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」

たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」

たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」

たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」
たまし 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くつくしきこと。又、其の所。夫木「覚れにける高津の宮のあさ原、なほたましきのむらさめの露」

たる

たる

たる

たる

ぬの白装の上ゆ浪多利(び)字鏡(鏡)

たる(自動) 前條に同じ。「帯垂れさがる」

たる(他動) 垂らす。さぐ。ぶらさぐ。記「まよがき鏡にかき多禮」

たる(自動) 武烈紀「大君のみ帯のしづはた結び陀黎」

たる(自動) 記「まよがき鏡にかき多禮」

たる(自動) 記「まよがき鏡にかき多禮」

たる(自動) 記「まよがき鏡にかき多禮」

たる(自動) 記「まよがき鏡にかき多禮」

たる(自動) 記「まよがき鏡にかき多禮」

たる(自動) 記「まよがき鏡にかき多禮」

たる(自動) 記「まよがき鏡にかき多禮」

なるやうにしたるを吹寄割(きり)といふ

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

もの。つらら。枕風などのいう吹き

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

紅色帯を見る。我が國、東海より西海に産す。しまをこせ。

たる

「後たれと知りけり」その人の姓名を知らずして問ふに用ふる疑問の代名詞。

たれ

形小さく、左右の戸を蔽うなどにて垂れかけたる物。

たれ

萬玉たれのすの垂簾(れん)を行きがちにいへなすとも君は通はせ

たれ

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる

たる(自動) たるさま。たるさま。たるさま。たるさま。

たる

だん—だん

たるもの。宇津保歌上ゆひ緒にはだんの組して結ひて一源傳古今和歌集玉の軸、だんのからくみの紐など、なまめかしうて「平緒の種類にいふ語。紫綬・青綬・蘇芳綬など色によりて種類を稱あり。ひら(平緒)を見よ。玉葉(平緒)三舞人裝束中同綬綬共付平緒、其色任意のひらをならんには、むらさきかはにてしか(よ)「練貫の一種。肩より据まて、横筋を一寸餘りの幅に織りたるもの。地は黒く、筋は白し。女房内記「十二月何にても白くならぬだんの袷は、裏も表の如く染めわけ候」

だん

天下之疑二固執り執りて變ぜざること。又、專一なること。易經「介如石焉、寧用終日、斷可識矣」

だん

物。ひとへもの。ひとへ。後漢書「祖父、喜者越布單衣、光武見而好之」

だん

たんいづけんうらうらう 単一弦運動 (名) 「理」等速の圓運動をなせる點を、の直徑上に投射せるとき、其の直徑上に生ずる振動、長さの端に錘を釣り下げ、錘の長さに比して振幅の極めて小なる振動をなすしむるとき、錘の運動の如き是れなり。

だん

たんいづけんうらうらう 単一弦運動 (名) 「理」等速の圓運動をなせる點を、の直徑上に投射せるとき、其の直徑上に生ずる振動、長さの端に錘を釣り下げ、錘の長さに比して振幅の極めて小なる振動をなすしむるとき、錘の運動の如き是れなり。

だんら—だんえ

飲。痰飲の病は明らめ難し「療治夜話」風邪に感冒し、宿本の痰飲と心病と共に發動し

だんえ

だんえん 暖烟 (名) あたかきけむり。あたかきもや。吳融詩「暖烟輕淡草葉」

だんか

だんか 擔架 (名) 病者・負傷者などを載せて運搬する具。竹にて框を作

だんか

だんか 炭坑 (名) せきたんから(石炭坑)の略。

だんか

だんか 炭坑 (名) せきたんから(石炭坑)の略。

だん—だん

たるもの。宇津保歌上ゆひ緒にはだんの組して結ひて一源傳古今和歌集玉の軸、だんのからくみの紐など、なまめかしうて「平緒の種類にいふ語。紫綬・青綬・蘇芳綬など色によりて種類を稱あり。ひら(平緒)を見よ。玉葉(平緒)三舞人裝束中同綬綬共付平緒、其色任意のひらをならんには、むらさきかはにてしか(よ)「練貫の一種。肩より据まて、横筋を一寸餘りの幅に織りたるもの。地は黒く、筋は白し。女房内記「十二月何にても白くならぬだんの袷は、裏も表の如く染めわけ候」

だん

天下之疑二固執り執りて變ぜざること。又、專一なること。易經「介如石焉、寧用終日、斷可識矣」

だん

物。ひとへもの。ひとへ。後漢書「祖父、喜者越布單衣、光武見而好之」

だん

たんいづけんうらうらう 単一弦運動 (名) 「理」等速の圓運動をなせる點を、の直徑上に投射せるとき、其の直徑上に生ずる振動、長さの端に錘を釣り下げ、錘の長さに比して振幅の極めて小なる振動をなすしむるとき、錘の運動の如き是れなり。

だん

たんいづけんうらうらう 単一弦運動 (名) 「理」等速の圓運動をなせる點を、の直徑上に投射せるとき、其の直徑上に生ずる振動、長さの端に錘を釣り下げ、錘の長さに比して振幅の極めて小なる振動をなすしむるとき、錘の運動の如き是れなり。

だんら—だんえ

飲。痰飲の病は明らめ難し「療治夜話」風邪に感冒し、宿本の痰飲と心病と共に發動し

だんえ

だんえん 暖烟 (名) あたかきけむり。あたかきもや。吳融詩「暖烟輕淡草葉」

だんか

だんか 擔架 (名) 病者・負傷者などを載せて運搬する具。竹にて框を作

だんか

だんか 炭坑 (名) せきたんから(石炭坑)の略。

だんか

だんか 炭坑 (名) せきたんから(石炭坑)の略。

兩はつつおでも有る「曾根崎心中」さては御前は旦那様か「回婚人が其の夫をさしていふ語。をと。良人。因妻をを圍ひ置く男子の稱。因商人などの、其の顧客に對して用ふる敬稱。狂言屋、算置きと侮つても、方に旦那があるぞ」
 (一) 狂言屋、算置きと侮つても、方に旦那があるぞ」
 (二) 狂言屋、算置きと侮つても、方に旦那があるぞ」
 (三) 狂言屋、算置きと侮つても、方に旦那があるぞ」

一種の稱。風俗文選「端無のじばん」
 一種の稱。風俗文選「端無のじばん」
 一種の稱。風俗文選「端無のじばん」

だんなに 單 (一) だに。ただ。體記「唯單有一摩」(一)と(二)に。まるで。たんに淡如 澹如 (一) たんに淡如に同じ。
 たんにん 單寧 (英: Tannin) (一) (二) 澀皮、五倍子等の粉中に多量に存し、水に溶け易き淡黄色の粉末。弱酸性ありて滋味を有す。膠質、蛋白質を不溶性の物質となすにより、鞣皮を製するに用ひらる。其の他、いんきの製造、黒染、及び媒染劑等として用ひらる。鞣酸。
 たんにん 擔任 任務を擔當すること。その事をひきうること。うけもち。民事訴訟法「原告若くは被告に代り訴訟を擔當すること」。

だんのう 堪能 (名) (一) かのうの(二) 飽き足ること。満足。淡經出世傳「乞食・非人の身となつても、二人一所に居る上は、堪能ではあるまいか」浦島年代記「年寄つた親二人、口先でなりとも小優しうものいへば堪能すると知りながら、犬猫を飼ふ様に思ひ居る不孝者」
 だんのう 淡濃 (名) あはきとこきと。うすきとこきと。濃淡。
 たんは 丹葩 (名) 赤き花びら。又、赤き花。鮑照詩「輕步逐芳風、言笑弄丹葩」。

だんない (形) (一) 大事なの(二) 差支へない。苦しからず。意とするに足らず。狂言「かやうの物は、あがりましても苦しう御ざりませぬ。だんない、一つ食はうに」今宮心中「門を明けたは誰ぞ、だんない者」浮世床「又あしたになりませぬ。やあ、だんない」

だんなは 澹泊 (一) あさりしたること。さびりとしたること。飾り又てらはぬこと。楊雄文「人君以玄默爲神、澹泊爲德」諸葛亮文「非澹泊無以明志、非寧靜無以致遠」
 だんなは 澹泊 (一) あさりしたること。さびりとしたること。飾り又てらはぬこと。楊雄文「人君以玄默爲神、澹泊爲德」諸葛亮文「非澹泊無以明志、非寧靜無以致遠」

だんねつ 断熱的壓縮 (一) 断熱的壓縮 (二) 断熱的壓縮 (三) 断熱的壓縮
 だんねつ 断熱的壓縮 (一) 断熱的壓縮 (二) 断熱的壓縮 (三) 断熱的壓縮
 だんねつ 断熱的壓縮 (一) 断熱的壓縮 (二) 断熱的壓縮 (三) 断熱的壓縮

だんは 丹波 (名) たんばやき丹波の略。茶道茶室「丹波」。古丹波は太閤時代なり。本朝陶器「丹波」の高取。あが野。肥後。丹波。膳所。朝日。赤ははは上作なれば、諸器用なり。
 たんは 丹波 (名) たんばやき丹波の略。茶道茶室「丹波」。古丹波は太閤時代なり。本朝陶器「丹波」の高取。あが野。肥後。丹波。膳所。朝日。赤ははは上作なれば、諸器用なり。

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

だんなの 端方 (名) だんたく方正なること。宋書「形短小、而坐臥端方」韓愈文「持端方」

